

日本の繊維産業の中では、戦後に花開くアパレル産業の分野で強調される要素であった。実際、アパレル産業の主要部分は大都市立地型でデザイナー（ラオスのシンでは図案師の位置にいる）の意義が大きい。この、意匠デザイン力が重要で大都市立地の中小工業では、たとえば1920-60年代の東京の玩具生産なども念頭に浮かぶ。そこで頻発する、下請業者が製造問屋から預かった「型」を流用し、第三者に製品を販売する事態は、本書が強調する織柄の剽窃と同根の問題から派生する現象であった。しかしその中でも、玩具生産は急成長を遂げている。一方産地織物業では、産地内で開発された意匠を、窃取の対象ではなく、産地ブランドとして織元間で共有化する方向が現れてくる。この様にみると、本書で明らかにされた市場形成の過程、特に高級品のシンにみられる個人的統治の特徴がカバーするのは、織物業における市場取引の発展過程において、重要ではあるが、ある特定の局面に限定されるものであった。しかし一方で、そこに内包された市場形成の論理は、織物業に限らず、大都市立地の産業分野に共有される問題領域であった。その意味で、本書の内容は広い視野から検討されるべき内容を豊富に備えているといえる。

それは、たとえば市場形成と産業における技能形成のとのかわりにも現れている。高級シンの生産には、一定以上の技能を有する織子の確保が不可欠であり、それが市場形成の在り方——取引契約の選択等——にも一つの規定要因となっていた。しかし本書では、この技能はディアスポラ集団に継承され、いわば市場取引の外から与えられるものとして位置づけられるに留まっている。一方、たとえば京都西陣などでは、徒弟制度による技能形成の内生化が重要な論点であるし、内機経営に技能伝習の機能を見出す見解も提出されている。本書で触れられている、世帯内での製織技能の継承——母から娘へ——も、それが婚姻等を通じて拡散・普及するか同一集団内にとどまるか、とどまるとしたらその条件は何かなど、検証されるべき論点は少なくない。たしかに著者の主要な関心は経済学的な意味での「市場形成」であり、本書はそこに議論を絞りこむことで、収集した多

様な情報の中から、体系的な理解を紡ぎだすことに成功した。その意義を十分に認識したうえで、著者の市場形成論への焦点の当て方が、本書の豊かな内容が産業発展をめぐる議論へと広く展開する余地をやや狭めている印象をもったことは、筆者の望蜀の感として記しておく。

最後に、織物業におけるジェンダー分業の問題について触れておこう。ラオス手織物業で印象的なのは、製織工程を担う織子のみならず、小売店や織元も、女性が担い手として活躍していることである。日本の産地織物業でも西陣などでの職人的な性格を有する織手を除けば、製織工程を担ったのはほぼ女性であった。しかし織元その他の織物関係者の大部分は男性で占められている。さらに明治期の入間地方の間屋契約の事例では、実際の織子が農家世帯内の女性であっても、帳簿の契約主体としては男性名（農家戸主）が挙がっていることがほとんどであった。日本とラオスの織物業は、織物＝女性のジェンダー・イメージが共通するようであり、それを支える構造は大きく異なっていた可能性がある。それは、ラオスの織子の独立志向や、織元経営への参入・退出の在り方にも影響を与え、個人的統治の機能を左右する要素であったかもしれない。本書の成果は、市場形成と社会構造との関係を考える上でも、示唆的な内容を含んでいると思われる。

（谷本雅之・東京大学経済学研究科）

堀江未央、『娘たちのいない村——ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』京都大学学術出版会、2018、v+348p.

本書の冒頭で、著者は、2010年3月に雲南省のラフの村での住み込み調査を始めた頃、「どうしてラフの村にはこんなにも女性が少ないのか」（p.1）という疑問を抱いたと述べる。ラフの村に若い未婚女性がほとんどいないのは、1990年頃から多数の女性が内陸部の農村地域に婚出したからであった。この現象の背景には、内陸部農村地域において、一人っ子政策の実施で男女比の均衡が崩れたことや、多くの女性が都市に出稼ぎに出たことな

どによってヨメ不足が深刻化したことがあるという。著者は、こうしたラフの村から農村地域への女性の婚姻移動を、「どこか遠く」にある「へば（漢族）のくに」へと結婚して移動するというラフの人々の理解に沿う形で、「遠隔地婚出」と呼ぶ。本書はラフの村を中心に行われたフィールドワークにもとづき、こうしたラフ女性の遠隔地婚出と、それに伴う家族、婚姻、ジェンダーの変化について論じた民族誌である。以下、本書の内容を紹介したうえで、本書の貢献と可能性について若干のコメントをしてみたい。

第1章では、女性の国際移動や婚姻移動の先行研究を参照しながら、本書がラフ女性の遠隔地婚出にどのようにアプローチしていくかが論じられる。論点は多岐にわたるが、「送り出し社会の論理に着目する」(p.2) という本書の基本方針を念頭にまとめてみると、近年の婚姻移動女性を対象とした研究では、構造的要因に規定される移動女性の脆弱性の指摘・解明から、構造的制約のなかでの行為主体性／エージェンシーの強調へという大まかな焦点の移行が認められる。後者の枠組みにおいては、前者では軽視されていた移動女性自身の声を聞くことができるという利点がある。しかし、そこではいかなる行為を主体性の発揮とみなすかは研究者側の判断に委ねられており、また、西洋近代的個人観が温存されているようにも見える。そこで著者は、送り出し社会での調査にもとづき、従来の研究において行為主体性の発揮の契機とされてきた女性の移動を、ラフの人々がどのように解釈するのかを描き出すという研究方針を採用し、そうした手法を、エスノメソドロジーから着想をえて「エスノ・エージェンシー」と名づける。

第2章では村・家の空間秩序と婚姻慣行が、第3章では調査村からの遠隔地婚出の始まりとその後の変遷が、それぞれ説明される。遠隔地婚出の変遷のみをまとめておくと、村からの遠隔地婚出の拡大は、1988年の瀾滄大地震による生活基盤の崩壊を重要な契機とする。当初は、親に何も言わずに「突然姿を消す」形での移動が多かったが、1990年代になると仲介者のネットワークが発達し、多くの「ヨメ探し漢族男性」が村を訪れるようにな

る。こうして2000年代にピークを迎えた遠隔地婚出であるが、2008年に県公安局によって、ヨメ探し目的の漢族男性の来訪を制限する措置がとられると、この頃にはすでに若年女性人口が少なくなっていたこともあり、婚出人数は減少していった。

第4章では、こうした歴史を持つ女性の遠隔地婚出の原因を、人々がどのように語るのかに焦点が当てられる。女性の遠隔地婚出は、しばしば漢族男性と「ポイした（逃げた）」と語られるが、常にそう語られるわけでもないし、そう語られたとしてもそのニュアンスが同じであるとも限らない。例えば初期の大地震直後の婚出は「ポイした」と語られることが一般的だが、被災後の生活苦などによるやむをえない選択という意味合いが強い。2000年前後に漢族男性がヨメ探しのために多数来訪するようになると、周囲の同意のもとに婚出する事例が多くなり、ポイという表現が用いられることも少なくなる。しかし2008年の漢族男性の来訪制限以降は、ラフ夫との問題を抱える既婚女性の婚出が目立つようになり、さらにラフの人々の生活水準の向上もあり、ラフ夫やラフ社会からの逃亡というニュアンスの強いポイとして語られるようになる。

こうしたポイという単語の使用の変化を踏まえ、さらに女性の移動の責任が誰に帰せられるかをめぐる人々の議論も検討される。ここで取り上げたいのは、2000年代後半以降、婚出の原因を語る際に、「シヨツツ」という性愛呪術が取り沙汰されるようになったことである。相手に放たれると「相手が自分のことだけを思うようにさせられる」(p.176) この性愛呪術は、女性自身が移動の過程について「何も覚えていない」と語ったときに登場することがあるという。著者は、こうした性愛呪術の語りや、2000年代後半以降、村の生活水準の向上などにより女性の遠隔地婚出の原因が特定されにくくなっている状況において、「女性自身の意図の不可解さを埋めるものとして」(p.185) 生起してきたと考察し、またそうした語りや女性の移動に対する責任を分散させていると述べる。

第5章では、遠隔地婚出した女性の婚出先での調査にもとづき、彼女たちの婚出後の生活状況および将来についての語りや考察されている。漢族

の農村で暮らす彼女たちの中には、婚姻移動してもそれほど豊かになれるわけではなく、また夫の家族などとの関係維持も時に難しく感じるという状況において、そのまま夫と暮らし続けるか、ラフの村に戻るかという葛藤を抱える者が少なくない。実際、漢族夫の元を去り、ラフ男性と再婚する事例も増えている。また、ヨメ不足がラフの村に連鎖するなかで、彼女たちが出身地に戻ってラフ夫と再婚することが難しくなっていることも、彼女たちのこうした迷いを深めている。

第6章では、このような不安定さを含んだ婚出女性の所在が、親やラフ男性たちによって交渉される様が描かれる。遠隔地婚出した娘の親たちは、ラフ同士の結婚では結婚すると婚家へと移るという娘の魂（「炉の魂」）について、その所在のあいまいさを案じることがある。それに対して、すべての行政書類の基礎となる戸籍については、親たちは、遠隔地婚出するときには生家に残したほうがよいという意思をはっきりと示す。また、第2章で論じられていた山神・家神が関わる村・家の空間秩序では、村内・家内での未婚男女の性行為は逸脱行為とされる。しかし、近年の村では、ヨメ不足を背景として、未婚男性が結婚したい女性をつなぎとめるため、婚礼を経ずに女性と同居し始める事例が増えている。こうした行為に対する批判もあるなか、夫婦であることを証明する結婚証の作成が、男性たちの間で以前よりも重視されるようになってきている。これらの事例の検討から、著者は、女性の所在が、「身体のありか、『炉の魂』」のありかだけでなく、戸籍の登録地、結婚証作成の相手など複数の要素によって判断されるハイブリッドの状態（p. 305）となりつつあると考察する。

最終第7章では、各章の内容が要約された上で、従来の女性の移動の研究において強調されてきた行為主体性を文脈化することの重要性、その際の人格観念の慎重な検討の必要性が改めて論じられている。

本書の文献リストが示す通り、近年、国際結婚して移動する女性を対象とした、社会学、文化人類学分野の研究が多数公刊されるようになってきている。これらの研究には、「グローバル・ハイバガミー」や「グローバルなケアの連鎖」といった俯

瞰的な概念を導きの糸として、婚姻移動の過程やその後の生活のなかでの女性たちの能動的な社会環境への働きかけ、つまり行為主体性を強調、評価するという大きな研究傾向がある。本書は、そうした研究潮流の成果を吸収しつつも、次の2つの点で、この研究分野にユニークな形で貢献しているといえる。

一つは、本書が、婚姻移動の研究においてあまり行われてこなかった送り出し社会における長期間のフィールドワークにもとづき、送り出し社会の論理とその変化に焦点を当てたことである。本書には、あるコミュニティのなかで女性の婚出移動がどのように広がるのか、そしてそれが人々にどのように受け止められているのかについての、今後の研究に何らかの着想をもたらすような事例記述と考察が多数含まれている。たとえば女性の婚出に対する「ポイ（逃げる）」という単語の使用の変遷の記述と考察は、婚姻移動に対するコミュニティの人々の見方を、一時点、あるいは特定のアクターの視点から把握することの限界、さらにそれを、一方向的な変化に収まらない揺れ動くものとして、諸要素の複雑な連関の中で把握していく視座の重要性を示していると思われる。

また、女性の婚姻移動が進展するなかでの、送り出し社会の性、ジェンダー、婚姻にまつわる規範の変化を描いているところも、関連文献にはあまり見られない本書の強みである。とりわけ村の空間秩序に反する未婚男女の同居の増加や、男性たちとの結婚証重視の傾向の広がりなどの、婚姻慣行や性規範、人格観念の変化についての論述は、女性の婚姻移動によるローカリティの再編成についての貴重な事例考察となっている。ただ上記の事例では、若年男性の見方や同居中のカップルの日常生活の描写がもう少しなされていれば、変化の内実がより掴みやすくなったのではないかとも思う。

もう一つは、本書が、女性の婚姻移動研究における、女性の脆弱性か主体性のどちらを強調するのかという論点から離れ、女性の婚姻移動についての人々の解釈に考察の重点を置いたことである。著者が「エスノ・エージェンシー」と名づける手法は、研究の世界で用いられる行為主体性概念を

一旦括弧にいれ、相互干渉しながら繰り広げられる。移動についての人々の語りを丹念に記述していく立場を指すように思われる。本書ではこのような立場から、関連文献ではあまり見ることのできない、様々なアクターによる女性の婚姻移動の解釈が記述されている。特に興味深かったのは、女性の移動の原因を語る際に、近年、「相手が自分のことだけを思うようにさせられる」(p.176)性愛呪術が持ち出されるようになったという指摘である。この、移動女性の行為主体性を一時的に否定するような語りは、女性の移動と所在についての不確実性が増大する現代ラフ社会において生成ないしは再生した、ローカルな行為主体性理解の一つとして注目に値する。ただ、最終的に、このようなローカルな行為主体性理解の数々の記述が、研究の世界における移動女性の行為主体性概念を用いた考察といかなる関係にあるのかがあまり詳しく検討されていないので、本書の手法が持つ理論的インパクトがやや不明瞭となっているように思える。従来の行為主体性概念を用いた女性の移動の考察と、本書の「エスノ・エージェンシー」の描写をより意識的に比較するなどすれば、この手法の理論的可能性がより明確となったかもしれない。

以上、女性の婚姻移動に主たる関心をおいてきたわけではないが、著者と同様に、越境的な人の移動に民族誌的にアプローチしてきた評者の立場からコメントを付してみた。おそらく、女性の婚姻移動における女性の脆弱性およびレジリエンスといった主題にコミットしてきた立場からは、別の読み方がなされるであろう。「ヨメ不足の連鎖」の(少なくとも調査時点での)末端に位置するラフの村からの女性の婚姻移動を主題とし、粘り強いフィールドワークにもとづいて送り出し社会の論理に焦点を当てた本書が、中国研究者のみならず、国際結婚、国際移住の女性化、再生産労働の国際分業などに関心を寄せる研究者、実践者にも読まれ、諸分野の議論に何らかの着想や刺激を与えることを期待したい。

(長坂 格・広島大学大学院総合科学研究科)

福浦厚子. 『都市の寺廟——シンガポールにおける神聖空間の人類学』春風社, 2018, 305p.

本書は神聖空間において人々が織りなす関係性を分析することにより、シンガポール社会をとらえようとする試みである。本書の議論の中心は道教系寺廟であり、とりわけそこで実践される童乩タンキエを介した問神に着目する。本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 序論
- 第2章 調査寺廟の概要
- 第3章 主席・道士・童乩
- 第4章 個人・家族・寺廟
- 第5章 問神の依頼者と依頼内容
- 第6章 門神での災因論
- 第7章 神聖空間のポリティクス
- 第8章 結論

第1章では、シンガポール華人の神聖空間の見取り図と本書の意義が示される。本書が主に扱う神聖空間は、道教系寺廟と墓地であり、そこでは神仙霊鬼を認める道教的な世界観に儒教や仏教の要素が混交した宗教実践が行われている。本書が着目する童乩を介した問神とは、道教系寺廟で実践される¹⁾もので、童乩に憑依した神や鬼神が童乩の身体を借りて依頼者に対して宣託を下したり、祓魔儀礼をしたり、依頼者の病気を治療したりする宗教実践である。

本書は憑依そのものに着目するのではなく、憑依された人とそれに関わる人たちとの間に生成する人間関係に着目するものである。具体的には、第一に、宗教職能者たちの関係に着目する。先行研究では、寺院の儀礼を取り仕切る司祭と、霊と交信できる霊媒、寺院の活動を経済的に支える世俗の有力者の3者の関係において、司祭と霊媒との間に上下関係があるとされてきた。これに関し

1) 本書の分析対象は男性の童乩による寺廟での問神であるが、まえがきでは個人宅で問神を行う女性の童乩の事例に触れており、童乩には様々な形態があることがうかがえる。